人殺し実験大好き集団

ネコガエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人殺し実験大好き集団

【Ｎコード】
Ｎ３２６５Ｚ

【作者名】
ネコガエル

【あらすじ】
陰で動き回り、巨大化していく人体研究機構。羅衣（ライ）、雅砥（ガト）、神蘭（ミラン）、紗魅（サミ）、禍赦（カシャ）がその真実を知る。
果たして、彼らがとった行動とは……。

闇は、忍び寄る。（前書き）

これは、私の初の近未来小説です。
初心者なので色々と下手な所はあると思いますが、一生懸命書きます。

誰か1人でも「面白い！」と思ってくれたら私は幸せです。

闇は、忍び寄る。

休日、家族４人でドライブに行った。
「父さーん」
身を乗り出す。運転している概螺(ガイラ)は前を向いたまま。
「なんだ、羅衣(ライ)？」
それでも、返事をした。
「腹減った」
「羅衣は、腹減るの早いなぁ。食べ盛りだもんな」
「おれも、減った」
「禍赦(カシャ)もか。それじゃあ、レストランでも行くか」
「お母さん、三ツ星レストランいきたいわぁ」
御籠(ミコ)がうっとりする。
「母さん、現実見ようよ」
「いいじゃない。夢見るのは自由よ。ほら、禍赦も想像してみたら？可愛い子から告白される所とか」
「それ、妄想って言うんだよ」
「禍赦は、グサッとくる事言うなぁ」
「何で父さんが言うの？」
「いいじゃないか。お母さんは、夢見るのが趣味なんだぞ。『あぁ、こういう人なんだからしょうがないか』とか思って聞き流しとけ」
「そうよ。その通りよ」
「母さん、何言われてるか分かってる？」
「もちろん」
「そうやって自信満々に即答されると、つっこむ気力も失せてくるよ……」
「どうしたの？具合悪いの？」
「疲れた……」
「なんだと？もう酔ったのか？」

「『疲れた』がどうやったら『酔った』に聞こえるんだよ」
「あ！レストラン発見！」
ふいに、ずっと外を見ていた羅衣が叫んだ。
「え？どこ？」
「ほら、あそこ。看板見えるだろ？」
「あ、本当だ」
「よし、じゃあそこで……危ない！」
グイッと体が左に引っ張られる。
「うわっ」
バランスを失い、禍赦にぶつかる。
概螺が急にハンドルをきったようだ。
「うわぁっ」
概螺の叫び声を聞いたその刹那、様々なものが羅衣を襲う。
体に響く、衝撃。ガラスが割れる音。何かが砕ける音。悲鳴。激痛。
「う……」
目を開ける。とたん、呆然とする。
「嘘……だろ」
車は、めちゃくちゃになっていた。
「嘘だろ。そんな……」
目の前は、真っ赤に染まっていた。
「そんな……」
足が、痛い。だが、見る事が出来ない。
今、目の前にあるものから目を逸らす事が出来ない。
「そんな……」
今、目の前にあるものが理解出来ない。
今、目の前にあるものが現実とは思えない。
だが、確かにそれは現実だった。そこに、残酷な現実として存在していた。
「羅……衣？……痛っ」
ハッとする。禍赦に視線を移す。

禍赦が身動きしたのだ。
「禍赦、大丈夫か？」
禍赦の髪が赤く濡れていた。
「頭切ったみた……うっ」
「禍赦！？」
「……嘘だろ」
禍赦がある事に気付いた。
「父さんと母さんが……死んだ？」
その言葉は、心に突き刺さった。
トウサントカアサンガシンダ
父サント　母サンガ　死ンダ
父さんと母さんが死んだ。
ふいに、実感というものが生まれた。
喪失感。悲しみ。後悔。その他諸々。
それらが体を、心を満たす。
気付いた時には、叫んでいた。
悲しみが、叫びとなって口から迸る。涙となって目から溢れる。
止められない。叫びも、涙も、止まらない。
自分が一体何を言っているのか分からない。何を言いたいのかも分からない。
嗚咽する羅衣を、禍赦は抱きしめた。
禍赦の頬にも、涙がつたっていた。
その体に、しがみつく。力の限りに泣き叫ぶ。
今、羅衣が頼れるものは、禍赦しかいなかった。大切な家族は、もう、禍赦以外いなかった。
全てが、遠のく。
足の痛みも。辺に鳴り響くサイレンの音も。自分達に掛けられる声も。
だが、それでも、禍赦の声は羅衣に届いた。
「羅衣が無事で、良かった」

禍赦が安堵の息と共に呟く。
その言葉は鮮明に、羅衣の心に届いた。
しがみつく力が強くなる。
そんな羅衣を見て、禍赦は思った。
もう、これ以上羅衣を悲しませたくない。
救出されても、病院に行っても、禍赦は羅衣から離れようとしなかった。
羅衣も、禍赦から離れようとしなかった。
「……あれ？ここ……どこだ？」
気付くと、何かの台の上に寝ていた。
「確か……羅衣と一緒にいて……」
記憶が鮮明になってくる。
「そうだ！そのまま寝ちまったんだ。……あ。羅衣？羅衣……が、いない？」
明らかに、そこは病室ではなかった。
「嘘だろ……。どこだよ、ここ」
「実験室なのだね」
ふいに、声がした。
「もう、起きてしまったのだね。もう少し、寝ていていいだね。おやすみだね」
プツリ、と腕に何かを刺される。
「嫌だ。羅衣！羅衣。羅……」
意識が、闇に引きずり込まれる。
禍赦はまた、深い眠りに落ちていった。

これが、羅衣１３才、禍赦が１５才の時に起こった出来事。

窓を閉め、息をつく。
これで、家中の窓は全て閉めた。

学校から帰り留守番中。
急に降り出した雨は横殴りで、慌てて閉めて回ったのだ。
「……あれ？」
だが、まだ雨音が大きく聞こえる。
「……あ。お父さんの部屋！」
鋭掠（トリヤク）の部屋の窓は全開。中は水浸しだった。
急いで窓を閉める。濡れた所を拭き始める。
「……鍵？」
床に、小さな鍵が落ちていた。
“鍵……鍵……どこいった？”
“どうしたの？会社、遅刻するよ”
“仕方ないか。いってきます”
朝鋭掠とした会話が、脳裏に浮かぶ。
「これ、何の鍵？」
首を巡らせる。
鋭掠の机の引き出しに目が留まる。
そこには、小さな鍵穴。
好奇心に駆られ、鍵を差し込む。
「あ。開いた」
カチャリと音をたて、鍵が回る。
駄目だと思いながらも、好奇心に負けてしまった。
引き出しを開ける。息を呑む。
あったのは、大量の書類。
さすがに、読むのは駄目だよね。
そう思って引き出しを閉めようとする。
その瞬間、あるものが目に飛び込んできた。
‘人体研究機構’
手が止まる。
「……何これ……。何なの、これ……」
もう、止められない。

読み始める。
１時間近くたった頃、書類を仕舞う。
書類は、全て読んだ。
「……何なの……。何で……」
呆然とする。
衝撃で、まともな思考が出来ない。
「ただいまー。ごめんね、神蘭。遅くなって」
「……お母さん、お父さんって……」
「お父さんが、どうかしたの？」
「……何でも、ない」
「大丈夫？顔、青いよ？」
「うん……。部屋で、少し寝てくる」
「分かった。ゆっくりしててね」
「……うん」
自分の部屋に戻る。
ボフリとベッドに倒れ込む。
「お父さんは、人殺しだったんだ」
呟く。
「会社なんて、嘘だ。あの機構に行ってたんだ」
人体研究機構報告書。
あの書類の中身は、想像を絶するものだった。
「どうやったら……あんなに、残酷になれるの？」
神蘭は、決意した。
「あんな機構、ぶっ壊してやる」
奥歯を噛みしめる。
「あんな……あんな……所！」
これが、神蘭が１３才の時に起こった出来事。

怖い。
気付くと、知らない人達がいた。何か喋っている。
だが、何を言っているのか、分からない。
怖い。誰か。
自分がいる場所が分からない。
台のようなものの上に寝かされていた。
怖い。助けて。
ふいに、叫びたくなった。
耐えられない。もうこれ以上、黙って、この恐怖に耐える事が出来ない。
口を開ける。
いや、違う。
口を、開けようとした。
呆然とする。
次の瞬間、これ以上にない程大きい恐怖が襲いかかってきた。
怖い。怖い。怖い。
恐怖で埋め尽くされた心は、悲鳴をあげる。
だが、それが声になる事はない。
怖い。誰か。誰か助けて。
体が、動かない。指一本、動かせない。
「おや。目が覚めたのだね。どうだね、気分は？」
男が、近付いてくる。
「おっと、失礼しただね。君は今、喋れないのだね。紗魅（サミ）ちゃんだね」
男は、にっこりと笑う。
名前を呼ばれた。
「これから、いっぱい僕が遊んであげるだね」
だが、目が笑っていない。
不気味に、ギラギラと光っている。
嫌だ。来るな。怖い。

「爛佳(ランカ)様！あちらの雌の生存サンプルに、問題が！今すぐ来て下さい」
「なんという事だね。鋭掠、紗魅ちゃんの子守りをしておいてだね」
「分かりました」
鋭掠という男が、顔を覗き込んでくる。
爛佳と呼ばれた最初の男が部屋を出ていく。
「今、ここにはおれ達しかいない。ここから逃がしてあげる。体が動くようになったら、そこに飛び込め。あれは非常用の抜け道だ。外に繋がっているはず」
鋭掠がパネルを操作する。
体から、何かが抜けるような感覚。
「……う……。あ」
喋れた。ホッとする。
「ほら、立って」
助け起こされる。
「あり……がとう」
だんだんと、体に力が入るようになってきた。
「そこに、入って。早く」
機材と壁の間に、体を押し込む。
「うわぁっ」
そこには、穴があった。
バランスを失い、落ちる。
そこは、チューブのような所だった。
落ちるというよりは、滑り落ちていく。
「痛っ」
尻餅をつく。
「ここから、登るの？」
壁に埋め込まれた明かりのもと、ぼんやりと階段が見える。
登る。登り続ける。
「あ。ここ……」

階段は、外に繋がっていた。
そこには、見覚えがあった。
「お母さん……。お父さん……」
歩き出す。すぐに、自分の家が見えてきた。
「……え？」
違った。
自分の家ではない。
自分の家だったものだ。
「な……んで？お母さんは？お父さんは？」
目の前にあるのは、燻る瓦礫。
紗魅の家は、火事の後だった。
「可哀想に……。家族３人全員焼け死んだんだって？」
「でも、１人だけ残されるよりはいいよ」
「３人全員で天国行けるといいわね」
「『行けるといい』じゃないよ。もう、行ってるんだよ」
「そうね。紗魅ちゃん達、いい家族だったものね。絶対に天国行ってるわよね」
そんな会話が、聞こえる。
「そんな……」
焼け死んだだなんて、嘘だ。
多分、いや、違う。絶対、あそこにいる。
自分は、逃げれた。だけど、お母さんとお父さんは？
“……あちらの雌の生存サンプルに……”
ふいに、さっき聞いた言葉が蘇る。
「そんな……。そんな…。……あたしだけなんだ」
涙が、溢れる。
「生き残ったのは……」
両親の居場所は、分かった。
だが、そこから両親を出す事は、出来ない。
「お母さん……。お父さん……」

フラフラと、歩き出す。あてもなく歩き回る。
これでもう、大切な人は1人残らず消えてしまった。
帰る場所も、居場所も、何もない。
止めどなく、涙は流れ続ける。
声を圧し殺して、泣く。
歩き続ける。泣き続ける。
あてもなく。止めどなく。

それは、紗魅が１４才の時の事。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3265z/

人殺し実験大好き集団

2011年12月11日10時46分発行